

時事新報

第千五百一號
明治二十年二月二日
舊丁亥正月十日
日出午前七時一分
入午後五時二十七分

月出午前十一時五十八分
入午前零時四十六分
潮午前十一時十七分
午後十一時四十三分

小學校を屬して更に十一小學校を設置す此年島尻地方に三小學校伊平屋島に本校一、分校三伊是名島に本校一、分校二設く八月宮古島平賀町校教則を普通小學校教則に改む十一月小學校教則を制定す十六年七月島尻地方に一小學校を設く十七年五月授業の改風を計らひ沖縄師範學校教諭まで本島各村校を觀察せしめ本島の小學校教諭を三地方に會集して授業法を一定せしむ七月與那部島に一小學校真間島に二小學校を設置す十八年八月村立小學校補助費下付の特典あり十二月島尻地方に二小學校を設く伊平屋島小學五年分校を設し二小學校を遅く十九年四月那霸製鹽場内に三小學校を設立し五月首里學區の三

樹山野を論せず樹
りこゝへ至る凡て
坦木田園も沃饒と
ければ多く松樹あれ
二十年を過ぐる者
は暗ら玄門の七八
これを東より西に

○一收二錠○一月前金五十錠○三箇月前金三回
一箇月前金六圓○
○吟事新報社ヨリ直接ニテ便ニテ送スルモノニ限り本支定價ノ外ニ
諸月二十六錠ノ發送料ヲ中止タ
吟事新報廣告料前金一行ニ付

一 行廿四字 自十一行至二十行 三十一行以上	限一日	六日迄上	十七日迄上	十六日以上
八	錢	錢	錢	錢
六	錢	七	七	七
五	五	六	六	六
厘	厘	錢	錢	錢
五	五	五	五	五
毛	毛	五	五	五
五	五	五	五	五

恐る可きは事の行違ひにあり

兄弟間の風波牽れど始先親戚朋友間の不和確執等を
は原を尋ねるに眞實、互ひの意見合ひざるより怨をもて
拂ふるものとては甚だ少しくして唯事情の相通せざる
ダ爲め又その問に行違ひより起るもの常よ多きが如左
左れば又や多年確執の朋友が偶然邂逅、心事を吐露す
て怨ちとの行違ひを悟り一朝の面談に十年の積怨を散
みて再び無二の友誼を結びたる如き談は毎度世間に聞
く所にして人生の不和怨恨多くハ事の行違ひにありと
知るべ矣

とひ間よりがて事情の通せざるか爲め往々事の行進ひる
るに益し免るべからざるの數にして古來の歴史を観る所
に當時に在て壓制暴虐の名を得又は實際人民を壓制する
に處しむる政府よろてその君相たるものゝ心事の思ひの
外に優しくして毫も壓制暴虐の心なきのみ幸る人民
を愛するれ心に乏しからざりしも全く事の行進ひより
して非常の禍亂劇變を招きしる事は古今其例少あから
ず佛國大革命の騒亂の如きは例中の最も著しきものよ
うに、

○大藏省告示第十二號
一金一千萬圓 七分利付金祿公債元金
右八整型債還ノ爲メ來ル三月中抽籤執行ス
明治二十年二月一日 大藏大臣伯爵松方正義
○東京府告示第十三號
本月十一日ヨリ工藝品共進會事務所ヲ上野公園内ニ
設ス
但シ同日以後本會ニ係ル届届書類ハ該事務所ヘ差
スヘシ

鉢城山脈高く聳へてこれを繞り西へ海水近く來り丘陵田園相雜るの間に在り城壁を以てこれを固む長さんそ三里その規模は決して小ならざるも頽敗して僅に形と存し内に縣廳及び人家なり人家は年々に減少し今年は一昨年に比して其半ばにも及ばずと云ふ現に三十に過ぎず余は旅中にて南陽唐津結城藍橋各地の如き官私家屋の頽敗甚ざ多く人烟稀少なるを見て此國亡滅の兆候あるを慨歎せしがあゝに至つて其念特に多く余が海津大尉一行とふゝに至り投宿せんとするに宿屋なく且つ馬を廻らざるにて七日未だ、主三

○天然痘撲滅防
神奈川縣に於ては日今北濱道地方天然痘流行れ消
滅の兆ある趣きの如きに當横濱港の如きは該地方と船舶の交通關係繁
るを以て自然該病波及の虞あるを保し難く現に同地方に散播する日本船
松會社陸奥丸及松前丸の如きは該業者を遣し來りたるとあり因りて關
の同地方より來る船舶あるときは直に水上警察官をして同船に就き其

鉢城山脈高く聳へこれを繞り西へ海水近く來り丘陵
田園相雜れる間に在り城壁を以てこれを固む長さ凡
そ三里その規模は決して小ならざるも頽敗して僅に形
を存し内に縣廳及び人家あり人家は年々に減少し今年
は一昨年に比して其半ばにも及ばずと云ふ現に三十に
過ぎず余は旅中にて南陽唐津結城藍瀬各地の如き官私
家屋の頽敗甚ざゑく人烟稀少なるを見て此國亡滅の光
景あるを慨歎せしがまゝに至つて其念特に多く余が海
津大尉一行どふに至り投宿せんとするに宿屋なく且
つ馬を繋ぐに處なし土民は云ふ昨年までは宿屋あり馬
舍もありしがいまあ廢しよりと依つて縣廳に赴き一
宿を請ふに公事廳あるのを門戸も敗ぶれ吏校廳も敗ぶ
れ草木籠々として公事廳前僅かに一條路あるのみ孔子
廟は尤も大切の處なれども瓦屋一棟漸くその形を存し
見るゆゑに余は重つて寄宿を求

○沖縄縣人口戸數職業別男女別近年人口増減調

鉢城山脈高く聳へてこれを繞り西へ海水近く來り丘陵田園相雜れるの間に在り城壁を以てこれを固む長さ凡そ三里その規模は決して小ならざるもの頽敗して僅に形を存し内に縣廳及び人家なり人家は年々に減少し今年は一昨年に比して其半ばにも及ばずと云ふ現に三十に過ぎず余は旅中にて南陽唐津結城藍鶴各地の如き官私家屋の頽敗甚ざゑく人烟稀少なるを見て此國亡滅の兆候あるを慨歎せしがよゝに至つて其念特に多く余が海津大尉一行どふにて至り投宿せんとするに宿屋なく且つ馬を繋ぐに處なし土民は云ふ昨年までは宿屋あり馬舎もありしがいままる廢しよりと依つて縣廳に赴き一宿を請ふに公事廳ゐるのを門戸も敗ぶれ吏校廳も敗ぶれ草木龙々として公事廳前僅かに一條路あるのみ孔子廟は尤も大切の處なれども瓦屋一棟漸くその形と存し見るふ忍びず余は僅かに將校廳と假りあれに宿泊せりこの廳とて一間四方の室二箇に過ぎず手障子とな全き者あし馬ハ屋外に繋た僕徒は宿に寝ねむ寒夜と遇させり余は京城に在り地方施政の不完全を聞たるをもろのこゝに至ると思はざと縣監は惟だ收稅と事とし衙門事務も一朝一夕もあらずの事と爲め

咸(八百十六戶)男十八八万六千三百五十五人女十八万六千五百五十六人計十七万二千五百十二人戶數七万五千八百四十戶(十九年一月一開)前增(男)二千五百三十七人女三千六百六十八人戶口數增(一千九百七戶)增十八人至四千四百二十人指物編四十三人石工六十一人形計數人船工四人農具駕十三人鍛工一百五十八人木挽繩十五人補工百六人驥二十六人泥工十七人染織二十三人瓦工二十一人屋宇繩四十八人塗工一人陶器工七人錦綢工二十二人製紙工十七人(十九年一月開)

鉢城山脈高く聳へてこれを繞り西へ海水近く來り丘陵
田園相雜るる間に在り城壁を以てこれを固む長さ凡
そ三里その規模は決して小ならざるもの頗敗して僅に形
を存し内に縣廳及び人家あり人家は年々に減少し今年
は一昨年に比して其半ばにも及ばずと云ふ現に三十に
過ぎず余は旅中にて南陽唐津結城藍浦各地の如き官私
家屋の頽敗甚ざゑく人烟稀少なるを見て此國亡滅の兆
候あるを慨歎せしがまゝに至つて其念特に多く余が海
津大尉一行とみゝに至り投宿せんとするに宿屋なく且
つ馬を繋ぐに處なし土民は云ふ昨年までは宿屋あり馬
舎もありしがいますむ廢しりと依つて縣廳に赴き一
宿を請ふに公事廳ゆるのを門戸も敗ぶれ更坂廊も敗ぶ
れ草木龙々として公事廳前僅かに一條路あるのみ孔子
廟は尤も大切の處なれども瓦屋一棟漸くその形と存し
見るふ忍びす余は僅かに將坂廊と假りあれ宿泊せり
この庭とて一間四方の室二箇に過ぎず戶隠守ミな空き
者あし馬の屋外に繩を僕從は櫻に寝ねく窓夜と遇させ
ど余ハ京城に在り地方施政の不完全を聞かひるともろ
のこゝに至ると思はざと縣監は能だ收稅と事とし衝
前蔣校もその一事に奔走するのみ砲手劉哨は其名をら
するに失ひ所謂空村と一般の状態なり今年のコレラに
ては各地共に死亡多く南陽、活川、唐津各地は余が旅行
の道筋に於て殊に死亡多かりと云ふ藍浦、庇仁兩縣
よ至るにその死亡甚ざしく路傍の死屍僵に棄を以てそ
の上と蔽ふおれ連續してあらざる處あしこれに一昨年

○沖縄縣學校沿革（昨日の續）

鉢城山脈高く聳へてこれを繞り西へ海水近く來り丘陵
田園相雜れるの間に在り城壁を以てこれを固む長さ凡
そ三里その規模は決して小ならざるも頽敗して僅に形
を存し内に縣廳及び人家なり人家は年々に減少し今年
は一昨年に比して其半ばにも及ばずと云ふ現に三十に
過ぎず余は旅中にて南陽唐津結城藍浦各地の如き宮私
家屋の頽敗甚ざゑく人烟稀少なるを見て此國亡滅の兆
候あるを慨歎せしがあゝに至つて其念特に多く余が海
津大尉一行どみに至り投宿せんとするに宿屋なく且
つ馬を繋ぐに處なし土民は云ふ昨年までは宿屋あり馬
舍もありしがいまある廢しよりと依つて縣廳に赴き一
宿を請ふに公事廳あるのを門戸も敗ぶれ吏校廳も敗ぶ
れ草木籠々として公事廳前僅かに一條路あるのみ孔子
廟は尤も大切の處なれども瓦屋一棟漸くその形を存し
見るふ忍びず余は僅かに將校廳と似りされに宿泊せり
この廳とて一間四方の室二箇に過ぎず右廊守とな全き
者あし馬の屋外に繩を僕徒は擦に寝ねば寒夜と遇させ
る余は京城に在り地方施政の不完全を聞たことともろ
のこゝに至ると思はざと縣監は惟だ牧稅と事とし衙
前蔣校もその一事に奔走するのみ砲手別哨は其名そら
するに失ひ所謂空村と一般の狀態なり今年のコレラに
ては各地共に死亡多く南陽・汚川・唐津各地は余が旅行
の道筋に於て殊に死亡多かりと云ふ藍浦・庇仁兩縣
よ至るにその死亡甚ざしく路傍の死屍堆に藁を以てそ
の上を蓋ふおの連續してあらざる處あしこれに一昨年
の饑饉なり此縣の如き田園も可成りお開らけ山海の所
利あるも人口は大に減少せりと云ふ
十一月三十日天曇りて寒く午前八時に華氏寒暖計四
十二度と報す此時余は海津大尉一行と東門を出で、或
は東或は南に進向し一小観え上ぼるに達く全羅道と或
はこれより北に通じる者皆之を越す

政府にてかかる聖の所爲を看過するに不可思議至り
なりさては政府も念々此聖と主義と同うするふやと迄
え推測を下して駒中早く既に不快の感を起しかくて是
民欲我に開互に都雅の要に載られく其折合とがく面白
からず我聲として讀圖々官民兩和訛と草するの勢と成
らざめたりし必今日に至りて之と観れば當時日本國中

鉢城山脈高く聳へこれを繞り西へ海水近く來り丘陵田園相雜れるの間に在り城壁を以てこれを固む長さんそ三里その規模は決して小ならざるも頽敗して僅に形を存し内に縣廳及び人家なり人家は年々に減少し今年は一昨年に比して其半ばにも及ばずと云ふ現に三十に過ぎず余は旅中にて南陽唐津結城藍浦各地の如き官私家屋の頽敗甚ざゑく人烟稀少なるを見て此國亡滅の兆候あるを慨歎せしがまゝに至つて其念特に多く余が海津大尉一行どふに至り投宿せんとするに宿屋なく且つ馬を繋ぐに處なし土民は云ふ昨年までは宿屋あり馬舍もありしがいま見る廢墟よりと依つて縣廳に赴き一宿を請ふに公事廳あるのを門戸も敗ぶれ吏校廳も敗ぶれ草木龙々として公事廳前僅かに一條路あるのみ孔子廟は尤も大切の處なれども瓦屋一棟漸くその形と存し見るお忍びず余は僅かに將校廳と假りされ宿泊せりこの廳とて一間四方の室二箇に過ぎず手障子と全き者あら馬ハ屋外に繋た僕徒は宿に寝ねば寒夜と遇させり余は京城に在り地方施政の不完全を聞ひるともろのこゝに至ると思はざと縣監は惟だ收稅と事とし衙前將校もその一事に奔走するのみ疏手別哨は其名そらするに失ひ所謂空村と一般の狀態なり今年のコレラにては各地共に死亡多く南陽、沂川、唐津各地は余が旅行の道筋に於て殊に死亡多かりると云ふ藍浦、庇仁兩縣よ至るにその死亡甚ざしく路傍の死屍僵に棄ててその上と蔽ふおへ連鎖してあらざる處あしこれに一昨年の饑饉なり此縣の如き田園も可成りふ開け山海の所利あるも人口は大に減少せりと云ふ

十一月三十日天曇りて暮く午前八時に華庄寒暖計之四十二度と報す此時余は海津大尉一行と東門を出で、威は東或い南に進向し一小観み上ばるに遠く全羅道と望めりこそ余が將み起らんとする者その狀跡も亦た質村寒里相連あるに過ぎざるべしと雖もすでよ忠清道にさり下つて田園に出で海岸に近く偶々干沙なるを以て四五里も泥土の灘はあるゝ見たり此邊海岸凡て然りとは飽きたゞ早く彼地より葛らんと欲し數々馬に鞭を加へく海水を堤防して開きたる者の如しあれを過ぐとば松